

66年前の防空壕が姿現す

Footprint
フットプリント

写真資料
調査部会発行
H23.12.15

2011年
第10号

米国防略爆撃調査団が空撮した旧浦上刑務支所一帯



① 西方上空からみた岡町防空壕。多数の壕の入口が見える



② エスカレーター工事で発見された平和公園の防空壕入口(10月12日)

爆心地のすぐそば 何を物語ってくれる？

さる十月七日、平和公園入り口のエスカレーター設置工事現場から、被爆当時の防空壕跡が発見された。報道によれば、同所階段脇の石垣を解体したところ、二箇所の横穴の入り口が発見された。この穴は高いところ

後市民団体からも保存の要望が相次いだ。長崎市内には戦時中の防空壕跡が現在も多数残り、山里小などでは一定の保存処理がされている。しかし被爆体験継承のため有効に活用されているとは言い難い。今回の防空壕はその位置的にも保存・公開により大きな効果が期待できる。長崎市は先ごろ左端の一ヶ所のみ埋設し他は保存という方針を発表、市の最終判断としたが、その後も全面保存を求める声が上がっている。

一九四四(昭和十九)年、米軍の本土空襲の激化に伴い、内務省は防空施設の整備強化を目的し「掩蓋式・横穴式防空壕」の設置を全国に指示した。長崎市は起伏の多い地理条件のため他の都市に比べ防空壕の整備は良好で、米国防略爆撃調査団報告書には「定員超過にすれば人口の五〇割を収容するのに十分な数の横穴式防空壕が(略)あった」と書かれている。

で、一・八段、幅は最大約一丈、奥行き約六丈。また、隣接して入り口を土砂で塞がれたもう一つの横穴があり、これら三つは内部で繋がっているという。

※上記①の写真は、本年二月米国立公文書館より私が新たに発見した一枚である。

資料から平和公園周辺の防空壕を見る

現在平和公園となっている

「刑務所の丘」には、被爆当時、周辺の町内会による防空壕が多数掘られていた。屋外の生存者は皆無に等しい爆心地から半径五百メートル圏内であって、それらの壕は複数の生存者を出したことでも知られている。今回、市民の間で関心が高まっているのを機に、被爆当時の写真、「原子爆弾災害調査報告集」他を基に、平和公園周辺の防空壕についてその概要をまとめてみた。

八か所以上の入り口を確認

■ 松山町防空壕

丘の南端、松山町交差点から松山橋にかけての人家背後の崖に町内会専用、隣組単位の壕が複数あった。爆心地からの距離は約一〇〇メートル

一二〇メートル。これらの壕は林重男さんや米戦略爆撃調査団の写真でその大半が確認できる。それによると、松山町交差点から刑務所に上る坂道の土手に計五ヶ所、その右

壕内で数人が助かる

刑務所の丘に多数の入り口

手松山橋までの崖に沿って三ヶ所以上の入り口が確認できる。今回発見された壕は、このうちの坂道の土手付け根部分に掘られたものの一部と見られる。

それに隣接する町内会専用の壕は、岡町西部の壕と貫通させる予定で掘削中であった。この壕にいた黒川幸子さん（当時九歳）は、松山町で唯一の生存者となった。黒川さんの証言によれば「壕の奥から助けてくれという声が聞こえた」とあり、ほかにも

住民がいたと思われるが、その安否は判明していない。

なお、この松山町と次の山里町防空壕の生存者については「原子爆弾災害調査報告集」収録の東大医学部の調査

からは漏れたと見え、全く記載がない。

北部町内会の壕にも生存者

■ 山里町防空壕

北部・西部町内会専用の壕が、丘の南東部、松山橋から現在の少年鑑別所裏までの下の川沿いの崖に掘られていた。爆心地から約二八〇メートル（三〇〇メートル）。米軍航空写真や他の複数の写真で約三ヶ所の入り口が確認できる。

またこれに隣接する一段高い敷地には、約十ヶ所の橋口町東側防空壕があった。このうち北部町内会の一ヶ所の入り口は、現在の平和公園作業員詰め所裏に現存する。この壕での生存者は村上ミツさん（当時六五歳）一九五

二つの壕繋ぐ作業が進行中

■ 岡町防空壕

現在の平和公園駐車場入口から松山町交差点にかけての人家背後の崖に、町内会専用、隣組単位の壕が複数あった。爆心地からの距離は一三〇メートル（二〇〇メートル）。米軍航空写真によれば、十五ヶ所前後の入り口が確認できる。このうち最も北に位置する町内会の壕は、一九四五年四月から松山町の壕と連結する予定で作業が開始され、奥行き約五〇メートルまで掘削されていた。東大医学部の調査によれば、壕内にいた五十二人

六年死亡）と月川美子さん（当時十歳）の二人。ミツさんと救助した孫の吉永紉治さん（当時十六歳）らの証言によれば、被爆時、壕内には他に老女五人、幼女一人がいたが全員が即死した。

のうち四十四人が即死、一人が後日死、生存者は七人である。消息が判明している生存者のうち、川口ヨセさん（当時五十五歳）は一九七五年八十五歳で死去、久間ヒサ子さん（当時十七歳）、他一人は現在も健在である。また東側の町内会壕は、現在の「被爆者の店」の位置から南東方面に向けて掘られ、反対側の橋口町の壕と連結する計画であった。東大調査によるとこの壕でも二人が生存、また近くの民家の自宅壕でも、十四歳の少女の生存が確認されている。

（松田 斉）

原子野の惨状写真に見入る

熊本でも長崎原爆展

被爆者の訴え関心呼ぶ

「原爆被災展」1945・8・9長崎の記憶」写真展は、八月八日から十五日までの八日間、熊本市役所ロビーで開かれたII写真II。長崎市から長崎原爆資料館が収蔵している資料、運命の時刻「十一時二分」で止まったままの柱時計をはじめ高熱で変形した石けん、爆心地付近の写真など約八十点を展示した。



「原爆被災展」1945・8・9長崎の記憶」写真展は、姿が広がる原子野のパネル写真の前では、多くの人が足を止め熱心に見入っていた。近頃のテレビニュースや新聞の写真で見た東日本大震災と重ね合わせたかのような惨状には、かなりのショックを受けていたようだ。また、「原爆」と「原発」のどちらも「放射能」の被害を受けるという問題を抱えているだけに、福島原発の事故に関連した質問が多かった。一方、長崎平和推進協会の語り部・永野悦子さん(八二)が最終日の十五日、熊本市役所別館にて十六歳で被爆した時の様子を語り「皆さんたちの手で戦争のない平和な国を守ってください」と訴えた。

熊本市は、人口七十二万人の九州三番目の大都市。さきの戦争では、米軍機による攻撃を度々受け、多くの犠牲者を出し、市街地も焼けるなど戦争の被害が大きかった。このため、平成七年七月「戦争の惨禍を繰り返さないことを誓う」と「平和都市宣言」をしている。また、県内には千六百人の被爆者があり、会場には朝早くから多くの市民が訪れるなど関心の強さをみせていた。
(写真資料調査部会長・深堀好敏)



爆心地標柱 立てたのは いつごろ？ 日記から推定

この写真は、原爆落下後初めて立てられた中心地の標柱です。撮影した人は林重男さん。原爆の記録映画を製作した「日本映画社」のスタッフとして長崎、広島で写真担当として長崎、広島で数多くの写真を撮った人です。ところでこの標柱は、いつ立ったかご存じですか。

今月の一枚

これまで発表された研究書や写真集では、立てられた時期がそれぞれ異なっています。このため、写真資料調査部会では、当時、東京から来て爆心地の確定作業を行っていたスタッフの一人、理学研究所の故木村一治氏が残した自筆日記から、「昭和二十年十月七日」の部分に注目しました。それには「再び爆心地に行き、現地につき考察す。爆央は結局、松山町一七〇番地通路傍のテニスコートの中央とし、煙突のかけらを立てて標識とする。……」と記しています。このため、写真資料調査部会では、日記に書かれたこの日を最初に爆心地標識が立ったものとして、全てのデータを統一することにしました。最初の写真には「爆心 Centre」と墨書していましたが、その年の十二月には撤去されており、その理由などは、当時占領下でもあり不明です。現在の中心碑は六代目となります。

(堀田 武弘)

わが国最後の空爆地で長崎原爆展

■秋田県外展

秋田市と長崎市、長崎平和推進協会が共催する「戦争・原爆被災展」は、七月二十二日から一週間、秋田市の秋田市立土崎図書館で開き、千四百人を超える市民が会場を訪れ、原爆による被災の実相にふれ、改めて戦争の悲惨さを強く感じていた。

会場には、長崎から運んだ長崎原爆が投下された「運命の時刻」の十一時二分を指したまま止まっている柱時計、



原爆展が開催された秋田市



会場には母親に連れられた学生もみられた

強力な熱線を浴び表面の一部が溶けている瓦、それに写真パネルなど約九十点を展示した。市立土崎図書館は、市の中心部から少し離れた所にあるが、この場所を会場に選んだのには、大きな理由があった。この一帯は戦争中、数多くの製油施設があり、米空軍が昭和二十年八月

十四日の夜半から翌十五日の明け、四時間あまりにわたって激しい爆撃を行った所。このため、この空襲で製油所だけでなく、周辺の住宅や民家も大きな被害を受け、二百五十人以上の死者を出すと、いう惨事に見舞われている。実はこの空襲は秋田市が受けた、最初で最後のもの。

涙浮かべて…小学生 改めて戦争の悲惨さを感じる

また、日本全土としても第二次世界大戦最後の空爆となつている。まさに終戦前夜から当日にかけての夜襲を受けた最後の場所だけに市民の平和問題に関心は非常に強い。

会場は初日から多くの人が訪れ、地元紙「秋田魁新報」では、「夏休みの総合学習の一環で、見学に訪れた地元

の土崎小学校六年生の姿もあり、惨状を伝える資料や証言ビデオに見入っていた。

中には涙をこらえて展示品を見つめる生徒もいた。児童の一人は「時間が止まったままの時計を見て、原爆の怖さを感じた。もう二度と同じことが起きて欲しくない」と話していた。」と紙面で取り上げていた。

また、同じ東北の福島で原発の事故があった後だけに、足を運ぶ人が多かった。夏休みということもあって、親子で見学に来る人が目立ち、放射線の問題について数

人から質問を受けた。中には

「長崎原爆資料館の展示品は、放射線の心配はないですか」「市内にあった捕虜収容所の外国人はどうなったのですか」など、具体的な質問もあった。共催者として同地を訪れ、資料や写真などの説明をしたが、会場には小学生がお母さんと一緒にきて、十六年前の惨状の写真をしながら戦争の悲劇など、真剣に話し合う姿があり、「この子供たちにいつまでも戦争のない平和な時代が続いて欲しい」ことを願いながら長崎に戻った。

長崎から被爆写真集などを贈る

また、同展には継承部会の語り部・早崎猪之助さんも参加、自分の被爆体験を熱く語り注目を浴びていた。なお、会場となった図書館の「戦争・平和コーナー」には広島原爆関連の図書だけだった

そこで後日、長崎の「原爆被災記録写真集」など数冊の本を寄贈、同市から丁寧なお礼状を頂いた。

(堀田 武弘)